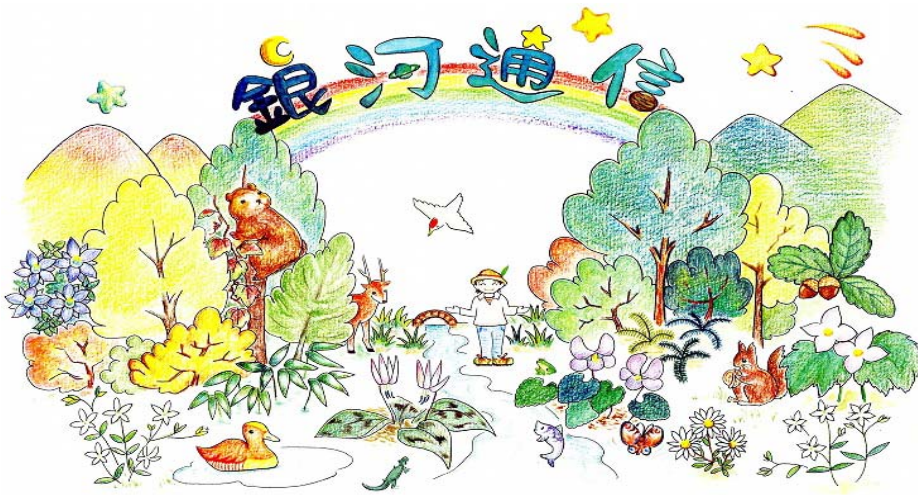


2021. 10. 15

No.226



編集・発行人 樋口みな子

E-mail

minginga@agate.plala.or.jp

URL <http://www13.plala.or.jp/minginga/>

郵便振替「銀河通信」

02740-7-56535

(郵送年間2,000円)

33周年にたくさんのメッセージありがとうございます

「銀河通信」は7月に発行した225号で33周年になりました。楽しいこと、苦しいこともあった年月。読者の皆さんのメッセージから大きな励ましをいただきました。自分の人生と重ねて読んでくださっていることも知りました。どこまで続けられるか分かりませんが、平和で、原発のない、すべての人の人権が守られるように小さな声を届けていきたいと思えます。

長い読者である科学者の小野有五さんと、「心に病気があっても地域で生き生きと暮らそう」と34年も活動を続けていらっしゃる松浦幸子さんには長いメッセージをいただきました。多くの読者には100字前後のメッセージをお願いしました。肩書、敬称は省略しました。



10.9午前6時
撮影
江別から見た
朝日に希望を
感じました。

世界にたった一人しかいないあなたの人生を心をこめて生きよ

一口に33年と言いますが、大変なことですね。いったん始めたことが、気づくと、いつの間にか人生になっていた、ということが誰にもあるかもしれません。ライフ(英)、ヴィー(仏)、レーベン(独)とみな違いますが、「ジーズニ」(露)と言ってみると、その音の響きがいちばんその深さを伝えてくるような気がします。30年前、やむをえず千歳川放水路計画の反対運動に加わり、誰も言わなかった「遊水地」を提案しました。苦労して開拓した農地を水につけるとは何事かと、大バッシングを受け、タンチョウも戻ってきますよ、と言ったら失笑されました。しかし、提案は最後に採用され、20年がかりで昨年すべての遊水地が完成、その前からタンチョウは営巣を始めたのです。人は知らないうちにミッションを与られます。自分でも思ってもみなかった使命、それは世界にたった1人しかいないあなたの人生を、心をこめて生きよ、というミッションかもしれないのです。(小野有五)

小さな居場所から発信し続けたい

平和・人権・環境と幅広く、市民の感覚から伝え続けて33周年。本当にすごいことです。心の居場所の紹介(225号)でフィンランドのラップランド地方を舞台にした、映画「世界で一番しあわせな食堂」をクッキングハウスのレストランに引き寄せて書いてくださっていることに、すっかり嬉しくなりました。というのは、今最も私が注目し学んで、みなさんに伝えている「オープンダイアログ」の発祥の地はまさにラップランド地方の「ケロプダス精神病院」だからなのです。日本の精神科医療に限界を感じ斎藤環さんや森川すいめいさんが、フィンランドまでオープンダイアログの実践の地に学びに行つて精神科医療を「対話」で変えようとしています。日本の精神科医療が変われば文化の水準があがると思って小さな居場所から発信し続けたいと思っています。(松浦幸子)

★平和への全方向に伸びたアンテナがキャッチしたものは、まさにみな子ワールドと呼んで差し支えないもの。2018年暮に鎌倉でお会いして以来の愛読者ですが本の紹介や映画批評はそれのみで優れた読みもの。ずっと続けて欲しいと願っています。小野有五さんとはヒマラヤ・ランタン村の共同調査をしました。(貞兼綾子)

★世の中の人々にとって何が大切な情報かという点について、発信者はゆるぎない信念と価値観を貫いて来られたのだと思います。手書きの時代から始まって独力でここまで、年月の重みをずっと感じます。様々な論評、書評、映画評等々、すべて私には貴重な情報源です。ぜひ40周年をめざしてください。(石川 旺)

★クッキングハウス30周年の歌の会でみな子さんに初めてお会いし、通信をおひとりで30年発行続けてこられたパワーに感銘し購読しています。誠実な考察と真摯な感性、心豊かになる写真、聡明な文章、素晴らしい！その後、調布にて再会した際、少女のような感性をお持ちのチャーミングなみな子さんの笑顔にまた魅了されました。埼玉と北海道でなかなか会うことは叶いませんが、出来ることをできる場所でやっつけていこうと勇気をいただく大切な存在です。(溝井留美)

記録は、名もなき人の行為を、人類に結びつけることが出来る

★「記録は世の中の片隅の出来事を、全体のものにする事ができる。記録は、名もなき人の行為を、人類に結びつけることが出来る」『ふだん記』を創刊した橋本義夫さんの言葉を思い出しました。「銀河通信」という「銀河鉄道」は、33年のときを経て人の心という宇宙空間に入り走り続けています。225もの通過した駅舎の記録は時を超えて受け継がれるに違いありません。(寺島一男)

★何かを始めるのは、希望と勢いで意外と出来るものですが、継続するのは至難の業。33という数字は私が日本を離れてからの年数と重なり、思わずため息。短いようで長い年月、感慨深いですね。あんまり遠くを見すぎずに、少しずつ歩いていくのが確実かもです。そこがみな子さんの『銀河通信』成功の秘訣なんじゃないかしら。(バルセロナ・笹森美帆)

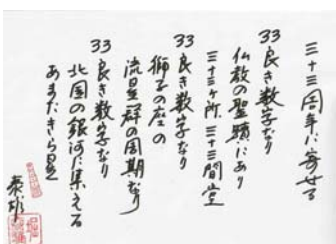
★樋口さんが市民目線で取り上げる記事にはその優しい人柄が表れており、いつも仕事に疲れると、銀河通信で息抜きをしています。これからも銀河通信を楽しく読ませていただきます。(小野寺信勝)

★宮沢賢治の世界を彷彿とさせるロマンティックな「銀河」という名称。現地を訪ね、本を読み、映画を見て、山に登る。常に読者と会話し情報を発信する。野の花のように爽やかに健気に力強く生きる。紡いで33周年素晴らしい！(大場幸子)

★登山、環境問題、銀河通信の発行等々を長く続けることは素晴らしいです。みな子さんの精神的な強さが表現されています。私たちは87歳と82歳ですが私は登山を楽しみ時々原稿書きをしています。淳子は毎日フィリピン人との英語会話を楽しんでます。(芳賀孝郎・淳子)

★200号の阿部一子さんの寄稿文の一節が全てを言い当てております。「むずかしい事をやさしく、やさしい事を深く、深い事を興味深く(面白く)伝えてくれる」これこそ樋口みな子さんの銀河通信です、と。全く同感です。「33」はエンジェル・ナンバーです。これからも出来る限り長続きさせて下さいね。(高橋備)

★いつも楽しく拝読しています。33年も多方面にわたる記事。登山や映画の感想に書籍案内と多方面の話題に読み応えあります。それも一人で作ってきたというのですから凄いですね。そのパワーの源は何なのでしょうかと感心しています。今後さまざまな情報を提供して下さいね。(仁木由紀恵)



前橋市のエスペラント作家
堀泰雄さんの言葉

て読者の投稿歓迎にして負担を減らしつつ、幅を広げてはどうだろうか。(堀泰雄)

★北海道の情報はなかなかないから、山行の話や花の写真を楽しみにしている。樋口さんの映画評で見たような気分になっている。33年もの年月をやり続けるのは、賞賛の一言だが、人間は年老いるし芯になるところは自分で書いて

多彩な話題にときめき自分を見つめる広場

★『銀河通信』は、私にとって心のアゴラです。季節の風とともに運ばれる多彩な話題にときめき、自分を見つめる広場なのです。また、ここは一息ついて、疲れを癒やすオアシスでもあります。旅を続ける力が湧きます。(高嶋道)

★お忙しい中、あちこち歩き回り見て回り、アンテナを張り巡らして学びを重ね、しかもそれを自らの文章で表現し続けてきた33周年、とにかくすごいんです。私も、樋口さんを目標に、自分なりのインプットとアウトプットを目指します。これからも前進し続けてください！(飯島秀明)

★映画「ハンナ・アーレント」鑑賞、中村敦夫一人芝居「線量計が鳴る」観劇など、みな子さんとの思い出はつきません。40周年の原稿依頼もお待ちしております！(太田朋子)

★銀河通信が発する物語は個人から普遍へ、そして時代の証言者ともなる。2001年3月20日の「反原発語り手北海道養成講座」、永江雅俊さんの笑顔が写っている。永江さんは先日78年の生涯を終えてお浄土に往かれた。彼の思いは通信から私に届く。受け継いでゆかねばと思う。(殿平善彦)

★花、鳥、風、光に囲まれて幸せな暮らしをしています。翻って人には欲があります。必ずしも悪いものではありませんが、銀河通信からも一線は必要だと教えてもらえます。ある方の『何もなくて豊か』は生き方を一変させる力のある言葉ではないですか。(興津さえり)

★19号にある増田れい子さんとは毎日新聞時代、増田さんは編集者、私は活版制作現場で、何度もお会いしたことがあります。れい子さんの夫の増田滋さんは、正義感溢れる社会部記者で1960年当時の毎日新聞労働組合本部委員長でした。私たちは労働組合活動のイロハを教えられました。「銀河通信」をここまで継続されたのは、大変な努力あったのこです。「力」に加えて「努力」にカンパイです(福島清)

★女性を中心とした評伝を書いています『評伝 菅野須賀子』を銀河通信で紹介していただきました。そのご縁で映画監督の宮崎信恵さんとお知り合いになることができました。多くの人の輪を作ってくださいありがとうございます。(堀和恵)

★33年間の社会奉仕に尽くした銀河通信の努力に最高の敬意を表します。今後とも愛読者の皆様と共に長く継続されることを願っています。(台北市 張玉龍)

★毎号、大変盛り沢山なテーマを取り上げて、一貫した立場から文章をまとめていらっしゃることに對して、敬意を表します。今後も、登山のように粘り強く歩み続けて下さい。(水溜真由美)

★札幌に転勤になって、来年3月で満50年。72年5月『自転車泥棒』でサークルに入会し、ほとんどの上映作品に関わって来ました。映画を通して多くの監督、製作者と映画の仲間と出合いが、映画人生を彩り心を豊かにする宝を沢山いただきました。あなたもそんなひとりです。銀河通信の映画紹介が楽しい。一句 安倍ボンボ！ 銭映くサクラド

平和や民主主義を守るためにもより強い市民運動が求められている

★世界中で民主主義の危機が訪れていると実感します。気候変動はもとより、平和や民主主義を守るためにも、より強い市民運動が求められていると思います。30年以上前はドイツでは若者、学生たちが政治意識を持ち、行動することに、私はビックリし、歓迎したのですが、今では若者の政治離れが見えます。こういう時代にこそ、樋口さんの新聞の意義は大きいと思います。これだけ高い質で続けてこられたことに、敬服しています。(フライブルク市・今泉みね子)



★大雪山の美しい草花や可愛い動物の写真があり、とてもカラフル。本や映画など話題もあり自然と文化の宝庫といえます。またさまざまな市民運動の情報もあり、「光は境界から・・・」北海道や

10.5 赤レンガ庁舎前池の紅葉 沖縄などローカルの豊かな自然と文化から日本の社会が代わって行くことを想像します。(高橋精巧)

★銀河通信って温かいご飯だなという思いが湧いて来ます。樋口さんが、ほかほか白ご飯で、そのまわりに、山々や空、星、風、季節の草花が彩り、スパイスが効いてほろ苦くもある社会の問題、本や映画の紹介もそれぞれに味わい深い。美味しく豊かな樋口さん流のメニューの並ぶ食卓を楽しませてもらっています。(七尾寿子)

★33年間も継続することは、まさに偉業です。誰も真似することができません。樋口さんの人生そのものです。どうか、お身体に気をつけて続けてください。

(石尾和彦)

★個人の冊子&メルマガが33年も続くなどなかなかいいことです。素晴らしいとしか言いようがありません。映画評や本の紹介などは、とても参考になります。評を読んで、「この映画見たい」と思うこともしばしば。これからも楽しみにしております。(文聖姫)

★33年の記録を残しているのは素晴らしい。手書きからワープロへの変更など時代の流れを感じます。私は、パソコンがクラッシュして写真や文書ファイルが一瞬に消滅するのを何度も経験し、記録を残す難しさを感じます。(関根達夫)

★一緒に働いていた樋口さんは、とにかく頼りになる検査技師さんでした。思えば、その頃からずっと発行し続けておられたんですね……。記事では、特に映画紹介が好きです。これからも次号を楽しみにしています。(小松知己)

★「銀河通信」の表紙を彩る北の大地の自然の美しさに魅了され、みな子さんの山や花を愛する気持ちが伝わってきます。その心が自然、家族、そして弱者など日常を破壊しようとする者、組織への怒りを国境を超えた映画や本の書評に丁寧に込めておられ、読むものに勇気を与えてくれます。(澤耕司)

★長く続くコロナ禍で、すっかり時が止まっているように思える日々。「銀河通信」は変わらず動き続けている。みな子さんの意志は強く、「銀河通信」は、みな子さんの感性と共に輝き続けている。(吉岡しげ美)

★いろいろ大変なこともあったと思いますが、よく続けてきたと拍手を送ります。長く見ているとやはり山の記事が一番樋口さんらしいと思います。私も北海道反核医師の会の会報を1989年から担当していますので(ただし発行は年2回)33年はほとんど重なっています。これからもお互い無理せず楽しみながら作っていきましょう。(塩川哲男)

★「銀河通信」33周年！！私などは新参の愛読者ですが、取り上げられる映画から発信されるメッセージや市民活動、果ては知人・友人まで…あまりに共感と共通点が多いことに驚き喜んで、目が離せません。これからも更なる盛り上がりと継続を！

(池田恵理子)

★平和、人権、環境分野への粘り強い取り組みに敬意を表します。樋口さんの「市民目線」は、民主主義の原点です。原発・核のごみ問題や各裁判の論点、書籍、映画、テレビ番組などの紹介を今後も楽しみにしております。(先川信一郎)

★みな子さんと出会ったのは、ひまわり保育園の授乳室でした。当時職場で家族新聞出版者が複数いました。銀河通信は家族の枠を越え自然保護に、反戦に、時に夜空の星情報と豊かでした。家を飛び出し、記者として書き続けられ、貴重な情報を頂いていることに感謝しています。(福山桂子)

秘密の銀河パワー

★映画評にブックレビュー、エッセイ、行動録・・・編集者2名は必要な月刊紙を1人で33年。驚異の人の脊髄は好奇心・向学心・正義感のDNAから成る。やらねばと思えば即行動するエネルギーは銀河との秘密交信からか。(山口力三)

★初めて目にしたのは、これも初めて札幌高等裁判所の原発訴訟裁判の傍聴しに行った時。内容が普通の印刷物とはまるで違っていて、華やかで(花の写真や大好きな映画の批評、本の読後感など)帰りの電車で読みふけりました。(高橋明子)

★発行人が踏破された山々の自然をありのままに伝えてくれるコーナーも、読書案内・映画紹介も、前向きに日々励む人たちを癒し、励ますものではないかと感じさせられ、市民によるジャーナルとしての普遍性をもつと思います。200号を祝ってかけつけられた、みなさんの集合写真の生き生きとした表情にもそれは示されているでしょう。

(伊藤誠一)

★33年前の手書きの創刊号は、登山先で見た自然の美しさが紹介されていました。そして号が進むごとに「原発、核兵器、アイヌ、強制連行、エイズ、9条、アウシュヴィッツ・・・3.11被災」などにご自分が読んだ本と観た映画紹介・・・これら環境、平和、人権への啓発に心から敬意を表し、応援しています。(鈴木澄江)

★創刊が1988年ですか、私がソウル五輪に取材に行った年です。縁あって200号を祝う会の時、皆さんの集合写真を撮らせていただきました。いい思い出です。40年、50年を目指して下さい。

(石井一弘)

さまざまな人々への差別・困難・勇気に 思いをよせて

★「書く」という意識は自分へ目的は何かといつも問う作業ですね。「銀河通信」は様々な人々への差別・困難・勇気に思いを馳せる行動力にいつも勇気づけられ、知らなかった世界に目を向けさせる豊かなものです。その発行を陰で支えてこられたご家族にも労をねぎらいたいと思います。(但馬桂子)

★「平和・人権・環境を伝えて33年」その言葉通り歴史に責任を持つ(持ちたいと願う)市民の立場から、ミニコミ誌(決して内容はミニではない)を発行し続けるエネルギーに敬意を表します。良心的な映画評・書評いつも参考にしています。(福原正和)

★銀河通信熱烈ファンの一人として、みな子さんの平和・人権・環境に向かう真摯な努力と感受性に心からの感謝と賛辞を送ります。大切な家族への想いがあってこそその快挙でしょうか。ご家族にも「33周年おめでとうございます！」と伝えたいです。(藤田春美)

★いつごろから頂いてきたのか、思い出せないほど元記者の老人になりました。33年間、反戦平和、人権擁護の路線をぶれることなく発信してこられた志に持続に深く敬意を表します。内外ともに強権政治の蔓延するなか、さらなるご健闘を祈ります。(三露 久男)

★33年定期的に続けられたことに敬服いたします。感動と励ましを頂いております。あまり無理をなさらず時には少し力を抜いて……。これからも楽しみにしております。(福田光子)

★長きに渡って発行されていること、ただただ敬服いたします。映画評と本の紹介、いつも参考にしています。(細田伸昭)



2017年5月、ハンセン病市民学会(大島青松園)での交流会で

★2002年ハンセン病回復者と北海道をむすぶ会結成時より事務局に加わって頂き、台湾のハンセン病療養所やポーランドのアウシュヴィッツ収容所訪問等、共に活動してきました。見聞き感じたことを発信し続ける樋口さんの

実践力・継続力が素晴らしく、いつもリスペクトさせて頂いております。(井上昌和・浅川身奈栄)

★樋口さんの読書や映画鑑賞、山登りに市民活動への積極的なかわり方などその行動力に感心させられています。その上、機関紙にそれらを書き連ねて発行を続けて33年、樋口さんは「小さな巨人」です。驚嘆と賛辞の言葉を送りたいと思います。(奥田聡)

★樋口さんの書評から大切な友人を得ましたし、豪雪の中でもよく映画を観、読書、登山とあくなき挑戦をするエネルギーはどこから来るのかいつも感心しています。情報のあふれている今、手づくりの銀河通信は私にとっても貴重な宝物です。(宮崎信恵)

★銀河通信とのお付き合いは1年7ヶ月ほどですが、コロナ禍でも映画や出版物の取材を絶やさず、山に登って花の美しさ伝えてくれました。その信念に脱帽しています。(岡崎幸彦)

知を愛することは哲学につながる

★(ひ)他人(ひと)には分らぬご苦労があったと思います。(ぐ)Good Job! (ち)知(sophy)を愛する(p hil)ことは哲学(philosophy)に繋がります。(み)皆も陰ながら応援しています。(な)なんとかご自愛しつつ (こ)今後も続けられることを祈念します。

(リュミエール池)

★良書の紹介や映画の感想を納得しながら読んでいます。銀河は読みごたえがあり、私の考えを代弁してくれてます。(戸谷真知子)

★60歳代の世代にとって、子供から学生へと時代を包んでいた「戦後民主主義」。銀河通信は現在のさまざまな表現を取り上げて、それを耕し、磨き上げていると思う。ただ本屋に行くと、それが消えかけていると体感します。次の時代はこの土壌を大切しながら生み出していきたいものです。

(佐竹政治)

★いつも拝読して、たゆまぬご努力に感動しています。体も頭も霞がかかった私ですが、貴女をみていると過ぎし日の自分を思い出します。貴女には及びませんが、私なりに活動していた時代がありました。どうかご健勝で。(蜂谷 緑)

★みな子さん33周年、休むことなく綴りましたね！ダンナさんのスケッチ、天体観測も楽しそう。自然保護、人権、貧困、公害、戦争、原発など難しいテーマに果敢に挑んできましたね。私たちに多くの示唆と学びを与えてくれました。(仲俣善雄)

★日々大変なことも起きる中、着実に発行し続けて33年、すごいです。人権を守る、環境を守る思いが伝わります。沢山の本を読み、映画を見て、その感動も添えての発信。まるで私の何倍もの時間を持っているかの様です。そしてエネルギーをいただいています。(宮本紀子)

★33年間も通信をひとりで発信し続けるのは、どんなに大変なことか、ちょっと想像しかねますが、きっとそれにふさわしい楽しみ、喜びがあったんだろうと、思います。一番の宝は文字通り多様な人々との出会い。通信を楽しみにしてます(伊藤功)

★とかく無力感に苛まれそうになるこの社会の中で、自分の手で火を灯し続けることの力強さを、身をもって示してくださっていることに、心からお礼をお伝えしたいです。ありがとうございます！

(林恭子・林心平)

★言ひ古された言葉ながら「継続は力なり」と言ふ言葉を連想する。樋口さんの『銀河』の33年225号を通覧してさう思ふ。人生の厚みと言はうか、書いた本人ばかりではなく、読む人にこそ力を与える、という意味でもある。(津田孝)

★続けることは本当に大きなエネルギーが要ります。すごい！好奇心を行動に変える力も見習いたい。映画や書籍はもう、自分で観た、読んだ気になってしまいます。33周年(&これからのあゆみにも)おめでとう！(志堅原郁子)

★本紙と出会えたのは30数年前の稚内の環境庁レンジャー時代の頃と思う。今年7月沖縄やんばるで喜寿を迎えた私は今や米寿を目指して毎朝函館出身の妻と健康散歩を続けている。40周年記念紙にもぜひ一筆をと熱望している。(水野隆夫)

私はここにいる、僕はここにいると 確認できる

★樋口さんの語り口での銀河通信は、本当に貴重です。私はこう考えてます、ということ柔らかく届けてくれるたびに、この映画や講演に触れたらどう思うのだろうと考えます。優劣や是非を問うのではなく「私はここにいる、僕はここにいる」と確認できることが本当にかげがえのない時間です。さてどうでしょうか、と勝手に楽しんだり、怒ったりできることに感謝しています。(黒尾和久)

★33年といえば創刊時の頃の子どもも一緒に成長したのですね。みな子さんの人生の中で銀河通信が支えともなってきたと思います。今後もマイペースで。

(泉 恵子)

★風の中のすばる／砂の中の銀河／みんな何処へ行った～「情報宇宙の大星雲」はNetflixやHuluだとしても、人が生きる力を貰うのは「地上の星」からだ。「銀河通信」は、日本の一隅でいち庶民が灯し続けている「地上の星」だ。この星は何処へも行かず34年目に向けて今も輝いている。(油谷良清)

★社会問題に向き合い、山や自然に親しみ、読書や映画などの文化を楽しみ、みな子さんのそのバイタリティあふれる活動には頭が下がります。通信50周年のお祝いも楽しみにしています！(鈴木ゆかり)

★メールやネット、スマホなし、加えてツイッター、SNSなどの意味不明・・・と相変わらずの原始生活。情報源はラジオと紙媒体のみ。だから速報、ニュース性はないけど、じっくり読める「銀河通信」も重宝しています。これからも頼りにしてます。(梅沢 俊)

★永きにわたって、しかもほぼ一人で通信を出されているみな子さんを尊敬します！私も去年からWeb上でフリーペーパーを発行していますが、代表とは名ばかりで編集その他、人任せでも原稿が書けなくて発行を遅らせることがあるのに…みな子さんは本当に素晴らしい!!これからもまた素敵通信をお願いいたします。(原田公久枝)

★医療機関で働いていた時からコツコツと書き続けて33年。現役時代から人を思いやる心と平和を願い、様々な活動に参加していく力強さにいつも元気で勇気を頂いておりました。「銀河通信」の星々には読者の皆さんの思い・願いが詰まっております。これからも「銀河通信」が元気であります事を心より願っております。

(菊地基文)

★2000年代まで手書きだったんですね！取り上げるテーマの幅広さや深さに改めて驚きます。ジャーナリズムはマスコミだけで、市民一人ひとりの活動がなるものだという事を教えてくれました。これからも楽しみです！(山崎裕侍)

★テレビ画面に「違うだろう」「訊かれたことに答えろ」「ごまかすな」と叫んでいるとき銀河通信に出会った。巻頭のニュース、紹介される映画や書籍の、みずみずしさが嬉しかった。どうか力まず、無理せずに。しなやかな銀河通信を。(林秀起)

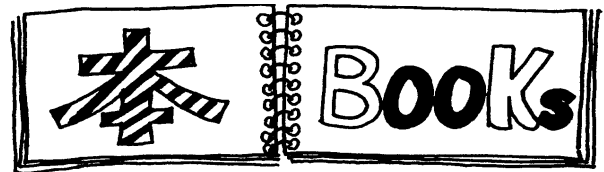
★33周年おめでとうございます。当時は埼玉県の高校生でした。1994年に日高町へ就職移住。日高山脈ファンクラブ設立21年目で念願の日高山脈国立公園化が成されます。樋口さんとも活動をご一緒できました。今後も銀河通信、期待しています。(高橋健)

★『銀河通信』との出会いは、3年前の札幌映画サークルの上映会で、手渡していただいたことから。メールにて貴重な情報を提供していただき、その熱量に感嘆するとともに敬意を表します。

(二通 諭)



手書き通信の頃、イラストは澄生さんが時々描いていました。星の観察を小学4年生からしているので観測会の様子がリアルに伝わってきますね。



他人の立場になって考えて みませんか



他者の靴を履く

アナーキック・エンパシーのすすめ

ブレイディみかこ著

文藝春秋社 1,595円

前著「「ぼくはイエローでホワイトで、ちょっとブルー」で中学校に通っている

息子の日常を書いた本の中でエンパシーという言葉が出てきました。息子さんはエンパシーを「他人の靴を履いてみること」だと答えました。シンパシーと間違えそうだけど、とても深くて知的で新鮮に感じました。

本書ではエンパシーを深く捉えなおしています。コロナ禍で、エンパシーの足りなさをこれほど感じたことはなかったように思います。自粛警察で、違反した人へのバッシングや、政治家の言動はエンパシーとは程遠く、仕事を失っても助けない姿勢に絶望しました。病院の空きがなくて自宅で亡くなった人もいました。コロナではありませんが私の家族も病状悪化で「診察を早めてほしい」と某病院に電話しましたが「1カ月後の予約日に来てください」と断られました。せめて主治医につないでほしかったです。

靴とは「他者の人生であり、生活であり、環境であり、それによって生まれるユニークな個性や心情や培われてきた考え方」であり、エンパシーは結局アナキズムなのだとブレイディさんは言います。「わたしがわたし自身を生きながら「他者の靴を履く」こと。そうすることで、眼前の世界に囚われない、もっと広くもっと違った世界へ想像力を働かせること。それこそが民主主義なのではないかと述べています。また女性が負っている「エンパシー搾取」という負の部分にも触れています。

コロナ禍で女性指導者を擁する国々がコロナ感染拡大防止に成功したことが話題になりました。メルケル首相を初めとして女性指導者が強調するのはエンパシーであり、人間の尊厳であり、ケアすることだと述べていて共感しました。



花はいのちの系譜を 未来へ届けるために 咲いている

キャンサーギフト
礼文の花降る丘へ

柚田美野里著
北海道新聞社 1760円

柚田さんには昨年9月に、紀伊国屋での写真展のご案内をいただき鑑賞してきました。ご病気のこととは知っていましたが、昨年お目にかかった時はお元気だったのですっかり回復されたと思っていました。

キャンサーギフトとは、がんになったからこそ見つけた小さな輝き。残された日々紡いだ思いを島の花たちの営みに重ねたフォトエッセー。5年前から肺がんの治療を続けている礼文島在住の写真家・柚田美野里さん。主治医から余命宣告を受けて本を作ること。礼文島での30年に及ぶ活動の結晶である写真と花と命を巡るエッセーが語りかけます。(案内文から)

「自分の体ががん細胞で満たされてしまう直前まで仕事ができれば、私は満足です」とありました。

「花の丘 ステージに立つ蕊たちは 咲き競うとも匂やかに笑む」と詠み、ひたむきさに触れるたび、花はただきれいに咲いているわけではない。いのちの系譜を未来へ届けるために咲いているのだということに気が付きますと書きます。「ヒタ生きる そんな気持ちを励まして シンと真白きレブンウスユキ」と詠んだ歌には、やがて深い青となった空には、星が姿を現しはじめましたと書きます。情景が目浮かぶようで心に深く届きました。

「発病してから5年余りがたった最近『あっ、これかもしれない』と思うような不思議な出来事が起こります。ほんの小さな幸せが、フワフワと降りてくれるような体験です。(略)もしかしたら私から、がんを受け入れた穏やかなオーラが出ていたのかもしれませんが。がん患者であることは決して幸せなことではありません。でも命の期限を知り、いろいろなことを諦めたその後で、当たり前と感じていたものが輝きを増すことがあるのだと思います」と柚田さんは書きました。

この本を読んで柚田さんが、がんと向き合い、さまざまな高山植物に心を寄せた文章に大きな勇気をいただきました。お元気かなと案じていた頃、写真展の案内をいただきました。柚田さんが10月5日に亡くなったことを知りました。66歳でした。突然で受け止められません。玄関に飾った柚田さんが撮影されたレブンアツモリソウを見ながらご冥福をお祈りします。



爆撃下の洞窟で新聞を 作り続けた記者

清六の戦争 ある従軍記者の軌跡

伊藤絵理子著 毎日新聞出版
1650円

毎日新聞の記者である著者は戦時中の新聞記者が何を記事にしたのかを探求しました。著者の「曾祖父の弟」が伊藤清六です。

太平洋戦争末期、爆撃下の洞窟で新聞を作り続けた東京日日新聞(現在の毎日新聞)の従軍記者が清六。日米激戦のさなか新聞は何を伝え何を伝えなかったか。最期の時まで新聞を作り続けたひとりの記者

の足跡をたどりました。

苦学して新聞記者になった清六は東京日日新聞で農政記者として農民の側にたった記事を書き「農民だって人間だ」の言葉を残しました。その後、アジア太平洋戦争に従軍記者として戦争報道に携わりました。統制下に置かれた新聞は、戦地では支配の末端をも担いました。

中国穀倉地帯で食糧や住居を奪われたはずの農民たちが歓迎する場面を記事にしています。農民出身の清六は中国の民衆、農民たちを親善の対象として共感していた姿を著者は知ります。その一方で南京事件に居合わせた清六は、捕虜や民間人の殺害の記事は書いていないことも記しました。複雑な心境が伝わってきます。

戦争末期、フィリピン・マニラに派遣され、山地に逃げガリ版刷りの陣中新聞「神州毎日」を発行し続けました。戦況を伝えるだけでなく、随筆や川柳などの投稿を募集、小説なども掲載したというから驚きです。親族として戦争報道への批判も込めながら、清六の温かい人間性にも触れています。山中のヤシ林で餓死。38歳でした。

著者は戦争報道への責任にも目を向けます。この本を読んだ前後に、読者から頂いたDVD「言わねばならないこと 新聞人 桐生悠々の警鐘」を見ました。その中で「今、活動をするにしても、報道をするにしても、ひとりひとりがそのあたりの覚悟をもって、変えていかなくては、きっとまた巻き込まれてしまうのではないのでしょうか。まさに『言わねばならないこと』を言う覚悟です」の言葉に集約されていました。ジャーナリズムは国家に常に批判的であらねばならないと改めて考えさせられました。

寄稿 コロナワクチンと基礎科学

歴代自民党政治の中でも最たる悪質な菅政権の「日本学術会議」事件。その芽は1980年代、中曽根政権当時の「臨調・行革」にあります。国鉄の民営化を先頭に、効率化と目先の利益を考えた社会と産業界の統合・編成は「国立大学の法人化」まで踏み込みました。大学(国立)の組合の委員長をしていた2002年当時、私は法人化のもくろみに抗して何回か国会請願や文部省交渉にも参加しました。その時の文部省の旗振り役が、今回のオリンピック組織委員会の橋本聖子氏であり、政府・文部省の説明(言い訳)も全く幼稚な、ひどいものでした。あれから20年近く、日本の大学・研究所の基礎研究予算は減少の一途をたどり、大学の世界ランクは下がる一方です。

先日、新型コロナワクチン開発の立役者、カリコ博士(女性、ハンガリー出身)とips細胞の研究でノーベル賞を受賞した京大の山中伸弥氏との国際電話対談を観て、山中氏の研究が、新型コロナワクチン開発の土台になったことを知り、基礎研究の大切さを改めて実感しました。一方では、何故日本でワクチン開発が遅れたのか、と言う疑問も残りました。日本はワクチンどころか、感染症の研究を引き継ぐ予算すら危うい現状です。

今後この新型コロナウィルスを凌駕するもっと手強いウィルスが次々と出現する危険が専門家から警告されています。10年後、20年後も含めて、基礎科学軽視の政治の行く末が心配なのは私だけではないと思います。(増子捷二)



魂を撮ったユージン・スミス

MINAMATA ミナマタ

アンドリュー・レヴィタス監督

報道写真家のユージン・スミスとアイリーン・美緒子・スミスの共著「MINAMATA」は水俣病を世界に伝え衝撃を与えた写真集でした。これを原案に制作と主演したのがジョニー・デップです。

「水俣病はまだ解決していないことを知り、この歴史は語り継がねばならないと思った」と映画化。物語は1971年のニューヨークから始まります。かつては戦場の取材で報道カメラマンとして活躍しましたが、沖縄戦の取材で負った痛手を抱えて、酒浸りの毎日でした。アイリーン(美波)に水俣病を撮影を依頼されます。二人は水俣に住みつき、人々の日常や抗議運動、補償を求め活動する様子を写真に収めていく日々が描かれます。「彼(ユージン)は心の中に痛みを抱えていた。でも水俣が彼の心を再び開いたんだと思う」と語るデップは、再びカメラをとり、闘いに身を投じてゆくその生き様を見事に体現しています。

胎児性水俣病の娘を育てる夫婦に出会い、有機水銀を長年にわたって垂れ流していたチツの責任を追及する住民らの怒りが胸に迫りました。住民運動のリーダーミツオ(真田広之)は川本輝夫さんがモデルだとわかりました。チツに一步も引かない姿は、何度もテレビ報道でみていた日を思い出しました。川本さんは天国から、「カッコよすぎだよ」と言っているかもしれないですね。ユージンたちは、チツの病院にも果敢に潜入し、水俣病患者にカメラを向けました。チツは、15年も前に有機水銀の毒性に気が付いていながら海にそのまま流していたのです。当時の報道写真も挿入されています。デップが真摯に患者さんに向き合う姿は、そこにユージンがいるかのようでした。しかし、チツ側からさまざまな嫌がらせを受けます。現像小屋が何者かに燃やされたり、チツ工場ユージンが暴行を受けて大けがをしたり。この映画でユージンの苦難を初めて知りました。そんな中で撮影されたのが、母と全身まひがある少女を抱く姿の厳かさと天使のような美しさに息をのみます。命の輝きと母の愛が伝わってきます。この写真は「入浴する智子と母」として世界中に報道された作品ですが、ユージンが「魂を撮るんだ」と言ったそのものの写真でした。坂本龍一の音楽がダイナミックで素晴らしかった。エンドロールで紹介された、世界各地の公害や原発事故や、核廃棄物、温暖化など、環境問題の写真資料が写し込まれ、今と地続きだと伝えます。とてもタイムリーな映画です。

私は某企業の産業衛生部で、産業廃棄物の測定をしていたことがあります。挫折しUターン。旭川の大病院で職を得たころに、石狩川の水銀汚染問題が起きました。市民運動に関わる中で「MINAMATA」写真展を開くことになり、若くて何の力もないのに、実行委員長をしたこと。写真展に合わせて講演会を開催しお若かった石牟礼道子さんや、川本輝夫さん、実物の原田正純さん、胎児性水俣病の坂本しのぶさんとの交流を懐かしく思い出しました。



助けてと言える社会に

護られなかった者たちへ

瀬々敬久監督

東日本大震災から9年後の仙台で、全身を縛られ餓死させられた遺体が発見される事件が2件続きます。いずれも福祉保険事務所の職員で、恨みを買うような人物ではありませんでした。捜査を担当したのはが笹篠(阿部寛)です。若い蓮田(林道都)と共に、容疑者として刑務所を出所したばかりの利根(佐藤健)を追います。

震災後の生活苦から生活保護を求める人々が増えあいつぐ申請上のトラブルも発生します。日本の生活保護制度の欠陥に迫る社会派ミステリーを瀬々敬久監督が映画化しました。原作は中山七里さんの同名小説です。

主人公の利根は、母親に捨てられ養護施設で育ちました。震災で行き場を失いますが、けい(倍賞美津子)とカンちゃん(石井心咲、後に清原果耶)に出会ったことで、けいの自宅で食事を共にするようになり、二人を護りたいという気持ちが芽生えます。大切な者を護ろうとする容疑者の利根と、大震災で大切なものを護る前に奪われてしまった刑事の笹篠。追う者と追われる者と立場は違っても2人は護りたい人を護ることが出来なかった孤独な痛みを抱えています。利根が言った「死んでいい人なんていないんだ」が、いつまでも心に残りました。

震災後増え続ける生活保護率を問題に、生活保護申請を受ける側と、許可する福祉職員側の両方の立場から、現状が描かれています。今のコロナ禍と重なり、とても他人ごととは思えませんでした。生活保護を受給させまいとする行政に怒りを覚えました。様々な事情で申請を取り下げざるを得ない人々もいます。家庭の事情を全て知らせる必要があるのでしょうか。「どうやって食べていくのですか」と手を差し伸べてほしいです。映画は護られなかった人たちに「声をあげてください」と訴えます。とても想像できなかったラストですが、鋭い問いかけが胸に突き刺さりました。



ミャンマーの民主化を求めて

異国に生きる 日本の中のビルマ人

土井敏邦監督

「北海道でミャンマー民主化を支える会」主催の上映会に参加しました。

1991年、ミャンマー軍事政権の弾圧を逃れて、妻と家族を祖国に残して単身日本に渡るという選択をしたミャンマー人青年のチョウさんを主人公に14年間にわたって追いつけた記録です。2013年公開。

チョウさんはミャンマーを逃れて、生きるためにレストランで働きながら、東京を拠点に民主化運動を

続ける毎日。数年後にやっと難民認定が下りて妻ヌエさんとの再会が叶います。ヌエさんの来日で二人で経営するようになったミャンマー料理店は、ミャンマー人コミュニティの憩いの場になっていて、いつも人があふれています。

年老いた父とは第三国のタイで14年ぶりに感動の再会を果たすものの、その後の訃報に際して帰国することはできませんでした。チョウさんは、東日本大震災が

起こったときには、「今度は私たちが日本に恩返りする番だ」とミャンマー人の有志を募って被災地向かいました。「困っている人がいれば助けるのは当然のこと」と語ります。チョウさんの無欲で祖国の民主化をひたすら願い、行動する姿に心揺さぶられました。自分自身の生き方を問われたように思いました。日本は難民に温かい国とは言えません。ミャンマー民主化の運動を応援したいと思います。

Cinema Graffiti <私の映画評> シネマグラフィティ

君は世界を守れ、俺は君を守る

『少年の君』

樋口 みな子

札幌映画サークル会報
シネアスト
2021年11月号
号掲載



本作は名門大学を目指す女子高校生と、ストリートで生きる不良少年が、痛みを分かち合い心を通わせて生きていく姿を描きます。監督は香港生まれのデレク・ツアンです。

2019年6月を予定していた中国国内での上映も公開も延期されました。過激ないじめ描写などが中国の検閲にひっかかったのではないかとされています。そのためほとんど宣伝されなかったにも関わらず同年10月に公開されるや、約240億円の大ヒットを記録しました。人数に換算すると1600万人の観客動員になるでしょうか。中国市民の底力を引き出した作品の魅力に、圧倒されました。

舞台になっている重慶は急速に発展した街で、監督はこの物語をこの場所で描こうと決めたそうです。「起伏の激しい街並みや高層ビルは、何か圧を感じるものがあつた」と語っています。地面すれすれの場所で生活する人々の頭上に、高いビルが威圧的です。階級と建物の階層がまるで比例しているように、ここから逃れられないような光景に、ニエン(チョウ・ドンユイ)がシャオベイ(イー・ヤンチェンシー)に「ここから二人で出ていこう」と誘うシーンが印象的。

ニエンは大学進学のための全国統一試験まであと数ヶ月。生徒たちは机の上に山のような教科書と参考書を積み上げ、必死に受験勉強に励んでいました。そんなある日、同級生がクラスメイトのいじめを苦にして、屋上から飛び降り自らの命を絶ちます。生徒たちは走り出し、一斉にスマホを向けます。でも悲しんでいるというよりは、興味本位にしか見えません。ニエンは少女から前日に「私、いじめられているの」と声をかけられながらやり過ごしたことに後悔し、遺体にそっと自分の上着をかけます。しかしそのことがきっかけで、いじめの矛先はニエンへと向かうようになります。学費のために犯罪ストレスの商売に手を出している母親以外に身寄りはなく、頼る者もないニエン。同級生たちのいじめが日増しに激しさを増してゆく中、下校途中の彼女は集団暴行を受けている少年を目撃します。とっさの判断でニエンが窮地から救った、その少年がシャオベイでした。辛くてもひとりぼっちの日々を送る優等生の少女と、13歳で母に捨てられ、小さな窃盗をしながらスト

リートに生きるしかなかった不良少年。出会うはずのなかった二人が惹かれあい、愛を育てていく過程が言葉は少ないけれど切々と伝わってきました。ニエンに救われたことで、人生を見つめなおすシャオベイがとてもいいです。知性を感じました。

夕暮れの街をバイクで走りぬき、シャオベイが住む粗末な家でささやかな食事をし、受験勉強をするニエン。二人は不器用だけれど、お互いの痛みを誰よりも理解します。ニエンが静かに流す涙に、私も一緒に泣きました。ニエンに対する執拗で陰湿ないじめの防波堤になっていたのがシャオベイです。「君は世界を守れ、俺は君を守る」と彼はニエンに影のように寄り添い、いじめていた生徒たちに無言の警告をしていました。シャオベイが付き添えない一夜に、ニエンは壮絶なリンチを受け髪まで切られます。それを知ったシャオベイの涙が忘れられません。彼は怒りをこらえ、自分の髪も刈り上げます。言葉ではなく行動で痛みを分かち合う姿が強烈。二人を引き裂き、社会から抹殺しようとする過酷ないじめに、胸が張り裂けそうになりました。ニエンへのリンチを機にトーンが一転。純愛物語からサスペンスに変わります。

終盤はいよいよ受験日。雨の中、多くの受験生が集まりその中にはニエンの姿もありました。そして、まさにその時、二人目の死体が発見され、殺人事件としてドラマに絡みつきます。犯人は誰なのか。ニエンとシャオベイの胸にある思いがありました。二人はどうなったのかと気になっていたラストに穏やかな希望の灯を見ることができました。(略)これほど説得力を持った作品を私は知りません。いじめや学歴偏重社会、貧困と格差の問題へのメッセージを明確にしなが、ストーリーやキャラクターもとても魅力的です。

香港の民主主義を支えてきた市民団体が、次々に解散に追い込まれています。ここまで、今の中国の負の側面を果敢に問題提起した作品はあったでしょうか。本作は香港映画としてアカデミー賞国際長編映画賞にノミネートされました。

購読料と寄付をありがとうございます(敬称略)
7.27~10.2

高橋精巧 中川路朋子 清水俊子 石川旺 村田和代 糟谷奈保子 奥田聡・坂田久子 塩川哲男 中川充 津田孝 山川陽一 佐藤雅彦 泉恵子 大橋晃 吉根由起子 高橋備 益子美登里 齊木登茂子 小松知己 藤田春美 石井一弘 福山桂子 岡村雄二 太田朋子 谷井利明 中川洋子 富森保枝 新井喜美子 長澤恵子 佐藤登代子 安立尚雅 堀和恵 大久保フヨ 菊地晋 張玉龍 水野隆夫 福島清 林心平 福原正和 神原照子 岡崎幸彦 合計211,000円と高橋備(切手多数)は印刷と送料に使わせていただきます。たくさんのご寄付ありがとうございました。